

『不繫舟漁集』について

要 木 純 一

一、はじめに

現代中国知識人の価値観が、我々が中国のいわゆる古典の読解を通じて想像された所のそれと、くいちがいを生ずることは、しばしば見られる。このことは、日本人の勝手な思い込みを責めたり、中国が社会主義国であること、文学革命、文化大革命等の精神変革に原因を求めたりすることによって、さしあたつての説明は可能であり、そして有効な場合も多いであろう。しかし、筆者は、元末の江南において、士大夫の思潮に巨大な変化がおこり、それが現代にまで底流として承継されているという仮説を以て、考えている。すなわち、唐または宋の古典完成期の価値観は、重要な部分を残しながらも、いったんこの時期に衰亡し、新たな、したがって、中国の古典にのみ親しむ日本人には、なじみの薄いなものかが始まつたのである。

その「なじみのものか」がどのようなものであるか。意余りて力の足らざる筆者は、個別の例をいくつかあげることが出来ても、未だ総合的に実証することを得ない。個々の文人の文集において、それと疑われるものを幾つか指摘したにとどまる。ただ、その作業を続ける中で確信できたのは、文学史上、著名な人物——この時期でいえば、楊維禎や高啓——だけを扱っていたのでは、筆者の求めるものは得られないということである。

一つの文学史上特記すべきことが生じるに際しては、それに向かつて、さまざまのベクトルが働いている。それらベクトルの総和を、例えば文学上の流派の対立というようなわかりやすい分析を進め、それらベクトルの共通の地盤

なり方向なりを指摘するのが、筆者も理想とするところであるが、今はその準備段階として、主だった文人の文学的志向を、出来るだけ、中国全体の新たな思潮と思わせるものと絡めて論じるように努力したい。

二、「復古」と「尚今」

さて、中国文学史において、個々の文学者なり、文学思潮を論ずる場合、必ず問題になるのが、「復古」的であるか、「尚今」(新たな文学的思潮に傾くこと)であるか、ということである。

元初の混乱がおさまり、科挙が復活すると、多数の文人が表舞台にあらわれ、文運は隆盛を迎える。このようなか、論争にまでは発展しないものの、「復古」、「尚今」或いはそれらを折衷した主張が、多くは他の文学者の文集への序の形で、行われるようになる。

近著『宋金元文学批評史』(顧易生、蒋凡、劉明今著 上海古籍出版社 一九九六年)の第四編 金元文学批評 第四章 元代中後期詩文批評(劉明今氏の執筆に係る)一〇〇一〜一〇〇二頁に、下の如くいう。

「元初に科挙を罷む。仁宗の延祐元年(一三二四)に至りて始めて恢復を行う。次年の会試に、楊載、歐陽玄、黄潛、馬祖常等は、皆是の科に於て進士に中る。これは、新たな朝の一代の、元皇朝の培育する所の文人、已經に成熟し、文壇に登上し了んぬるを標誌して着す。此の時、元は中国を統一して已に三十余年、宋金の余習は仍然として存在するも、但し新たな朝の一朝の的文風は、終於に漸漸地として形成す。歴代、元代文学を論ずる者は、大都認めて、これは是れ元代文学的一个の新たな朝の開端なりと為す」

このあとに歐陽玄、陳基、余闕の文章を引いていう。

「以上三家は、均しなみに、延祐科を復するの新たな朝の文風は、即ち『雅正』、『古を尚ぶ』、『辞章を尚ぶ』たることを肯定す。他們的論ずる所は、元代中後期文壇上の愈よ来りて愈よ甚しきの『古を師とす』乃至は『古を復す』的の傾向を反映し了んぬ。一方面は是れ宋金季世の文風に対する的の反撥たり、一方は也た当時流行す

る的文章と、世代の治乱相い盛衰すると、詩歌は当に風雅比興の義に合すべき的の観点と関わり有り」かく元中後期に「復古」の傾向が強いことを指摘した後に、「尚今」の議論もおこり続けたことをいう。

「復古の傾向深きを加うる的同时に在りて、復古に反対するの議論も也た一直として間断して過ぐる事有る没し」

このあとに、宋濂の文章を引いて、

「宋濂の批評するは還お只だ是れ『心を師とす』中の狂怪を以て尚しと為す的一派なるのみ、その他に心学的の影響に由りて、文学発展の規律に対する的の新たな認識に由りて、元代文論中に『心を師とす』『今を尚ぶ』『我を尚ぶ』的の議論は頗る少なからざる有り」

かかる新思潮の幾つかの派と文人を列挙して、中後期の詩文批評の二大流についてまとめる。

「古を師とす」或いは「心を師とす」・『今を尚ぶ』は、元大中後期の文人の普遍に関心する所的问题と成り了んぬ。各家は論ずる所は同じからず、角度は同じからず、但し、大致均しなみに這の二者を以て帰と為す。故に本章(元代中後期詩文批評の章のこと)は、元代中後期詩文批評を叙ぶるに、遂に『古を師とす』或いは『心を師とす』・『今を尚ぶ』の観点的の異同に按じて、両節に分ちて加うるに叙述を以てす」

元前期と比べて、『復古』『尚今』に関する批評が、ともかくも百出する状況に應じて、勢いこの二つの観点に分けて元中後期の文学を論ずるのは妥当であり有効であろう。それに、この時期の唐詩への『復古』志向の発生が、明代更には、現代中国に至るまでの、唐詩尊重の風につながっていくのであるから、見落としてはならない観点でもある。(議論を簡単にするために、やや武断であるが、「師心」「尚我」等も「尚今」に包摂されるものとして考えた。また、そもそも以上の引用は「文学批評」に関するものであつて、実際の創作は、よくあるように批評と乖離するであろうが、今は「批評」「創作」に相通するものがあるとして論を進める)

しかし、この二点からの分析もいくつかの問題がある。

① 前述の如く、「復古」と「尚今」との対立はどの時代にも存在するものである。その対立の様相は他の時代と

どちらがうのか。

② ある文章が「復古」または「尚今」を唱えていても、その文章を仔細に検討すると、「古」「今」が具体的にどのような内容をもっているのかわからなくなる場合が多い。「古」「今」の明確な基準がなく、単に気分的にあいまいに「復古」または「尚今」を主張するので、それらのことばを用いる各人に、共通の基準があるのかいささか不審である。

③ 西欧の「ルネッサンス」のように、復古を唱えながら、実は新しい風潮を代表することも文学史に多い。そもそも、元代の唐詩復帰の気運は、前代の余習たる宋詩的なものへの反発ではなかったか。

④ 「復古」だけの人間、「尚今」だけの人間は存在しない。人間は、相矛盾した要素の複合体であるから、ある場合は「復古」であり、ある場合は「尚今」であり、ある場合はそれらが混合した態度を持つることがときはむしろ自然である。元朝の文人も、過激に「復古」「尚今」の極端を主張するものはまれで、その調和を目指す者がほとんどである。『宋金元文学批評史』でも、楊維禎を、一方では「復古」（師古）の論を主張するものとして論じ、他方では「尚今」の論者として論じている。（同書一〇一六―一〇二二頁及び一〇三五―一〇三七頁）

『宋金元文学批評史』はこれらの難関を巧妙に乗り越えて、しかも二観点を首尾一貫して維持しているのであるが、翻って本稿はいかに論を進めたらよいか。

元末江南に生まれた新たな気運を、一文人の作品と生涯を通じて闡明しようとする企図からいえば、「復古」「尚今」の観点を、一概に旧套であるとして捨て去ることは出来ない。結局は『宋金元文学批評史』の方法に沿って考察を加えることになるが、先の①④の問題点を意識しつつ、より具体的に何が新しいかを指摘したい。

三、陳高の伝記

本稿で扱う『不繫舟漁集』（以下『集』と略す）の作者陳高の伝記は『集』冒頭の蘇伯衡の「陳子上先生存稿序」

や『集』附録に収める掲汰の「陳子上先生墓誌銘」でその大概を知り、更に諸家の贈答詩や『集』中の詩文の年代や記述で補うことが出来るが、それらを要領よくまとめたものとして、『中国文学大辞典』（一九九三 天津人民出版社）第五卷 三四四九頁 陳高の項目（楊鎌氏の担当）を、以下の論と関係するので全文を引用する。

「陳高（一一三一五～一一三六七）。元代の詩文家。字は子上、号は不繫舟漁者。温州平陽（今は浙江に属す）の人。元の順帝至正十四年（一一三四）進士の第に登り、慶元路録事を授けらるるも、職に任ずること未だ三年に満たざるに、便ち官を棄てて而して去る。方国珍浙東を占拠し、陳高を招納して幕僚と為さんと想うも、但し未だ能く願いの如くせず、又他を任じて慈溪県尹と為すも、他亦た職に就く有る没し、平陽城陥落する後、他家を棄て閩浙の間に往來す。至元二十六年（一二三六）の春天、海に浮びて山東に到達し、元朝的の河南王コゴテムル（王保保）に謁見し了んぬ。拔廓帖木兒は是れ朱元璋の唯一佩服したる元的元朝の大將にして、元明易代的の戦争中に在りて、足を牽ぐれば軽重ある的地位を有つ。陳高は拔廓帖木兒に向いて密かに江南の虚実と軍情を論ず。拔廓帖木兒ははなは很だ高興よきこころび、重用せんと準備するも、但し他は却つて病に因りて世を去る。陳高は孝子と作る時な就ち時名有り、京師に在りて欧陽玄、張翥、貢師泰、程文の的の器重を受け到る。他は時局を審度し、江南の形勢已に元朝に不利なるを看到りて、又毅然として海に浮かびて北上す、元朝に対して相当に忠誠なり。明初蘇伯衡は陳高の遺作を訪ね得、編みて『子上存稿』と為して世に刊行するも、但し今は已に伝本を見ず。今存する陳高の詩文集は名づけて『不繫舟漁集』十五巻と為す。『元詩選』初集は、陳高の詩七十九首を選入す。他的の『丁酉歲述懷一百韻』、『感興七首』等の作は都な是れ氣韻蒼涼沈鬱的の佳作なり。丁酉は元の順帝至正十七年（一一三五七）、正に是れ此の前後に在りて、他は官を棄てて而して去るなり。他は、長きこと百韻に達するの長詩を以て、自己の社会現状に対する複雑にして又矛盾ある的看法を表述し了んぬ、力度較や高し。他は還た写して『槿花を種う』有り、是れ棉花江南に在りて種植するに關する有るの一首の詩なり」

「元朝に対して相当に忠誠」「氣韻蒼涼沈鬱的の佳作」という表現から予想されるように、果たしてその人と為りも作品も、一見、復古保守の氣風が感じられる。が、それだけではない点を本稿では述べたいのである。

如上の伝記に、以下の立論のために、なおいくつかの事項をつけくわえれば、まず、科挙に合格する四十近くまで、志を得られず、故郷を離れて、蘇州を中心に、各地を、時には北方を放浪したであろうことが、作品からうかがえることである。一時慶元の録事に任せられたころ、友人の胡翰がおくった詩にいう。（『集』巻十六 附録「陳子上録事に寄す詩」金華胡翰）

「東甌に一士有り、周遊す吳楚の間。一歳ごとに一たび帰養し、四十にして来りて官と作る」

「諸友と共に豊山に遊宴す」（『集』巻六）詩の序に「至正戊子（十八年 一三四八）」とあるのが、『集』中にある最も早い年号であるから、『集』の詩文は三十代前半の失意と放浪の時期から始まると見てよいであろう。

ここで指摘すべきは、なるほど、蘇伯衡の『陳子上先生存稿序』には、大官にして一代の文宗たる歐陽玄をはじめ、歴歴たる表面との交流を記すが、その実は『集』の中に有名人との交際を示す詩文が少ないことである。楊維禎や高啓や劉基、宋濂ら文学史上の重要人物との直接の交流もなかったようである。わずかに、楊維禎の文学グループに属する錢惟善に与えた詩が二首あるのが目立つ程度である。（『集』巻三、「錢思復を送る二首」）文壇上は孤立しているといつてよいが、直接の影響関係はなくとも、一時の思潮は、周辺があつて中心があり、中心があつて周辺がある、全体像及びその配置の妙にあつて、一部の突出的なものに偏するのではない。彼の持つ志向も元末江南文人の共有するある土壤から生じたものと筆者は考える。

科挙に合格して役人となるも、挫折して、故郷に引つ込む。方国珍の乱にも、出処進退に気をつけて己を持した。この間ごく短期間であるが、隠やかな田園生活を営んだようである。土地の名士として、序や銘を請われ、後進の指導にあたる様子が『集』からうかがえる。

しかし、温州も元末の混乱の渦に巻き込まれ、陳高も家を捨て、最後の放浪が始まる。かくいうと、事勢に対して受身一方のように受け取られるかもしれないが、晩年海を渡って拡廓帖木兒のもとを訪れたように、策動に近い政治的な活動を続けていたであろうことは、気をつけなくてはならない。よし積極的ではなくとも、そのような役割を周囲や地域から期待されたにちがいない。

「陳子上先生墓誌銘」にいう。

「方氏至るに及びて、之（陳高）を招致せんと欲す、而るに従りて得る無し矣。再び慈溪県尹を授けらるるも、亦た起たず。方明善の周宗道と兵を構うるや、嘗て一たび出でて而して両家の難を解く」

これは、明史卷一百二十三の方国珍の伝に、

「年を踰えて（一三六三）、温の人周宗道は平陽を以て（朱元璋に）来降す。国珍の従子明善は温を守りて兵を以て争う」

とある事件に際して両者の仲介を果たしたのである。政治に距離をおいているが、単なる隠者と見てはならない。

かかる努力も実を結ばなかったようで、至正二十三年（一三六三）の末には、平陽は方氏に攻め取られてしまう。「集」の卷十六 附録の末尾には、「子上自識」という陳高の文章が載っている。平陽陥落後、放浪の中で、自らの人生を顧み、自分の生き方の結晶である詩文を何とか後世に残したいと願う、悲痛な文章である。全文を引用する。

「至正癸卯（二十三年 一三六三）十二月二十七日、平陽は守りを失う。余は時に郡城（温州）自り回りに州南に至る。変を聞きて倉卒として浙江行省都事王銓、伯衡と共に、夜山徑を尋ね、泥塗の中、崎嶇として、六十餘里を行く。麦城に至りて漁舟を得、海に浮かびて安固に達す。家人と別るるに及ばず。明年正月の朔、南塘に至る。二月、寒清の玉環に至る。迤邐たる道途、随处に留寓す。念えらく、余は布衣を以て進士に挙げられ、録を辞して帰隠すること已に八年なり矣。拙を守りて田を耕し、將に以て老いを終えんとす。而るに此の変故に罹りて、関を問いて遁逃するは、為にする所有るに非ざる也。心に愧ずる無からんを求むる而已矣。困厄顛沛の余、物に觸るることとに感を興し、率爾として詩と成る。聊か諸れを簡冊に筆して、以て忘れざるを示さん。間ま俗に應じて作る所の詩文有り、亦た並びに之を録す。其の妍醜は扱ふに暇あらざる也。至正二十四年（一三六四）春、三月乙丑朔旦書す」

『集』に見える詩文の中で、最も遅い制作に係るものは、至正二十六年（一三六六）、死の前年の作「丙午元日」

（『集』卷五）である。

「元日山寺に居る、梅花は酒樽を照らす。病余玄髪は少なく、酔後壯心は存す。天地腥羶は満ち、江淮蜂蟻は屯ろす。誰か施さん兵を洗う雨、吾は欲す天閭を叩かんことを」

乱離の中、老病の身でありながら、なお壯心が存するという。伝記に従って素直によめば、結局は内乱をおさめるため、渡海して元朝の有力な大将拔廓帖木兒に働きかけようという決意の程を示すがごとくである。

この翌年、北方に出かけるのであるが、『集』ではそのことに直接ふれる詩文はない。(あるいは『集』巻十五の「鎖鑄僉院に与うる書」はその事前運動の一つかも知れない)ただ、『陳子上先生墓詩銘』に下の如くいうのみである。

〔至正〕二十六年(一二三六)の冬、東西の浙陷る。明年(一二三七)の春、先生は海に浮びて山東を過ぎ、河南王太傅中書左丞相(拔廓帖木兒)に懷慶に謁す。江南の虚実を論じ、天下の安危を陳べ、当に何を以て已に至るのを禍いを弭め、何を以て未だ来らざるの憂を消すべきか(を説く)。適ま関陝は故多く、未だ之を用いず。士大夫は其の志を聞いて皆与に友とならんと願う。丞相も亦た喜びて、即ち之を官とせんと欲するも、其の志に非ざるを知る也。亦た強いず。数月にして而して疾いあり。八月十八日を以て邸に卒す。是の月二十日を以て、懷慶城南に葬らる。其の疾いある也、丞相は河南に留まり、医を遣わして往きて問わしむ。其の卒するや、官を遣わして祭りを致さしめ、贈賻すること甚だ厚し。其の葬るや、中書平章政事鎖鑄先生は同年にして実に之を經理す。四方の士、凡そ南自り而して来る者は皆会して哭す」

恐らくは伝聞に基いた、陳高自身のエピソードに乏しい記述で、却って陳高の企てが全て不首尾に終わったことを暗示するかのようである。翌一三六八年には、元朝は、新しく成立した明朝によって北に追い払われる。歴史的に見る限り、陳高の死は、滅びゆくものに忠義立てをした犬死にであつたといえるかもしれない。

しかし、変節をしたあげく、悪名に死んだ同世代の人々の不幸に比べられました。蘇伯衡の「陳子上の書に跋す」(『集』巻十六 附録)は、

「於戯、子上は其れ賢なる乎哉。錢用壬、傅子敬、趙時泰、唐元嘉は皆子上の同年の進士なり。彼は惟だ重んずる所を重んじ、而して重んぜざる可からざる所を重んぜず。愛する所を愛して、而して愛せざる可からざる所を愛せ

ず、その忘るる能わざる所を忘れずして、其の忘るる可からざる所を忘れ、其の去る能わざる所を去りて、其の去る可からざる所を去る。卒之に身を殞し家を亡い、墳墓は主無くして、而して郷里の羞と爲る。然らば則ち子上の不幸は、固より、未だ彼の四人の不幸に若かざる也。子上は、山東に客死すと雖も、然れども喪葬は礼を以てし、墳墓妻子は皆恙が無し。而して郷里は与りて榮譽有り、然らば則ち子上は豈に真に不幸也耶。甚だし矣、軽重の当に明らかによくして、而して取舍の当に審らかにすべきことは也。」

この文章は陳子上が死んで「二十年余」後に書かれたものである。結局は、元朝に対する忠義心を保持したまま、王朝交代の前に死ぬことが出来たことが慰めであることを、新王朝にはばかるために隱微な形で表明したかった文章だと思われる。そして、拙廊帖木兒に会見したことの功罪については何も述べない。

時代が降って、元代同様の異民族支配下の清代になるとその忠義について称揚し易くなる。四庫全書に収められた『不繫舟漁集』の提要にいう。

「蓋し国祚の阨危に当たって猶お力めて匡復を謀る。明太祖は王保保を真男子と称す。高の如き者は、事は就らずと雖も、其の志は亦た王保保に愧じず矣。但だに詩の伝うるに足るのみにあらざる也。」

それでも「事は就ら」なかつたことは認めざるを得ない。然らば、陳高の生と死は、現在の我々から見れば、頑迷保守な一士人のそれにすぎないのであるか。筆者は、以下、異なる観点から検討を加えたい。

四、テキストについて

ここで、陳高の別集『不繫舟漁集』のテキストについて簡単に述べておく。先に引用した『中国文学大辞典』では、蘇伯衡が彼の遺稿を編集して『子上存稿』と名付けたが今は伝本は見えないという。『四庫全書』の『提要』はいう。

「此の本は『不繫舟漁集』と題するは、何人の改むる所かを知らず」

これによれば、現『不繫舟漁集』は、すなわち『子上存稿』を改名したに過ぎないことになる。今、劉兆祐著『四

庫著録元人別集提要補正」(一九七八 台湾商務印書館)の「不繫舟漁集」の按語を見ると

「中央図書館に旧鈔本有り、『不繫舟漁集、元慶元路録事平陽陳高著、明八世孫侯官一元較』と題す。疑うらくは即ち一元改めて今題を称す」

とある。また、清の顧嗣立編『元詩選』初集(一九八七 中華書局排印本)の「陳録事高」の提要にも

「八世孫一元重校して而して之を刻す」

以上を総合するに現『不繫舟漁集』は『子上存稿』の旧をほぼ襲うものと筆者は考える。

ただし、蘇伯衡の編集を経たこのテキストが、果たして、陳高の全作品を網羅しているかは疑問で、先に引用した「子上自識」にうかがえるように乱離の間に多くの作品が失われたことは想像に難くない。蘇伯衡の「陳子上の書に跋す」も「陳子上の謝復元に遺る書」という『集』中に収められなかった書二通を謝復元に示されたのに感謝して跋したものである。蘇伯衡の整理も、形式で分類したに過ぎず、年代順に並べる労を省いた杜撰なものである。このような不安を抱えつつも、今は本集に則って論を進めるほかない。

底本には、『元人文集珍本叢刊』(一九八五 新文豊出版公司)巻八所収の民国十五年(一九二六)平陽陳氏重刊本(台湾大学図書館所蔵)影印本を用いた。文淵閣四庫全書所収本も目録したが、異同はわずかに過ぎない。

五、陳高の書生時代

さて、年代を追って、陳高の作品を見ることにするが、まず、科挙に高齡で合格するまでの、郷里を離れて放浪した時期を扱う。

数年の後に張士誠の乱が起こる高郵をおとすれた時の詩である。「己丑の歳、(二三四九)元正二月高郵を発す」(『集』巻三)

「昨日初めて歳を献じ、今晨高郵を発す。飄逢節序無く、此の身は真に浮くが若し。晴日は野水を照らし、好風は

行舟に順う。舟人は予が為に祝う、新年に百憂無からんことをと。自ら笑う道路の中、奔走何の時か休まん。朝には呉郷の客と為り、暮には淮楚に向いて遊ぶ。安居するは豈に願わざらん、況んや乃ち人の謀るに非ず。乾坤に終極無く、江海は淹留を成す。首を仰ぎて黄鵠を視れば、翅を奮うこと何ぞ悠悠」

元末の大乱が本格的になる直前、嵐の前のしずけさの中、意を得ぬままに客遊する不安を訴える。奇を衒うことなく淡々と叙述する。『四庫全書』提要に、陳高の作品の特徴をあげていう。

「文格は頗る雅潔。詩は惟だ七言古体のみ場を壇いままにす。絶句も亦た甚しくは意を経ず。其の五言古体は、源は陶潜に出で、近体律詩は、格は杜甫に従う。面目稍や別にして、而して神思は遠からず。亦た元季の錚錚たる者なり矣」

この詩も難語を用いることのない古風なおもむきである。自ら「不繫舟漁者」を名のるにふさわしい、あてどのない旅への志向を感じさせる。無論、本人が意識するところは、不安と苦痛に満ちているだろうが、詩として完成された芸術的空間の中では、「朝には呉郷の客と為り、暮には淮楚に向いて遊ぶ」、漂泊の中に自己の生のあり方を見出す劇的な人物である。末四句も常套を恐れずに、悲壮感に満ちた意境でしめくくる。確かに、五言古詩は彼の得意とするところのもののようにである。

彼の五言古詩に対する意気込みが、恐らくはこの放浪期に作られたであろう「感興」という二十四首の連作の序にかがわれるので引用する。

「漢自り以来、五言の作は多し矣。其の善き者は大抵皆直致、華飾の辞無し。簡淡にして而して意味は深遠なり。是を下れば則ち雕鏤綺靡にして風雲月露花草禽魚の間より出でずして而して理趣は蔑如たる也」

掲法の『陳子上先生墓誌銘』にも、

「先生は文を為るや、上は遷・固に本づき、下は諸子を獵す。先生は詩を為るや、上は漢魏に溯り、而して齊梁以下は論ずる勿き也」

といておりこの陳高の態度に合致する。更に引用を続けよう。

「昔唐の陳拾遺は、嘗て感遇の詩を作る。詞格は高古なり。而して新安の朱子は、則ち其の仙仏怪妄の説に淫するを病む。故に朱子の齋居感興の作は、乃ち一えに理に寓して、道教を扶樹し、而して辞の要妙は、特に其の余なる耳。殆んど未だ古今の詩人に於いて之を律するに易からざる也」

「感遇」「感興」のジャンルについてであるが、今は五言詩全体にも相通ずる点があるとして筆者は受け取る。陳子昂の詩を評価しつつも、朱熹のような考えもあることを示す。筆者のことはでいいかえれば、奇怪なイメージを伴う「情」を重んじる立場に対して、近代の朱熹は、「理」を重んじ、人民教化に役立つことを目指している。陳高は朱熹の作法に傾きながらも、なお陳子昂の風を慕うかのようである。序の最後までを引用する。

「予は客居して事無し。読書の余暇に、觚を操り翰を染め、意を詩に適かしめ、二十四首を得たり。亦た之を命けて「感興」と曰う。率ね皆興を託して章を成し、鄙俚文無し。固より敢えて作者の藩籬を窺わず。而して朱夫子の道教を扶樹する者に視ぶるは、又何ぞ敢えて望まん。独り古を陳べて今を道い、物を引きて類を比し、意は懲勸を寓し、雕鏤に習わず、怪妄に淪まざれば、則の万一に庶幾からん焉。或いは以て民風を観る者の採択するを俟つ可しと爾云う」

「雕鏤」といい、特に「怪妄」というのは、筆者の思う所、当時一世を風靡していた楊維禎一派の詩風を指しているのではないか。文学史的に分類するならば、陳高を、そのような新風に反発する「復古」派とみなしてさしつかえないし、そうするしかないであろう。

しかし、仔細に検討してみると、「復古」といっても微妙な色彩にいろどられていることに気付く。この場合「古」といつても、朱熹というフィルターを通した「古」を模倣しようとしているのである。朱子学の官学絶対優位が確立されておらず、むしろ新興哲学として受け取られていた当時、かかる態度に「尚今」の面があったといつても、あながちいい過ぎにはなるまい。逆に、楊維禎も、朱子学を含む宋学に、尋常ならざる研鑽を積んだ後に、狂に類した文学活動を始めたのであるから、「復古」「尚今」の様態はなかなか複雑である。

要するに、自分の心のありようを、社会に向かって表現するのに、最も便利な道具、意匠として、各人が、或いは

一個人の創作活動でもいろいろな場合に應じて、「復古」や「尚今」の立場を選んでゐる面が強いのではないか。「古」や「今」が何を指すかにこだわりつつも、その裏にある心のありようが読みとりたいと思ふのである。

「感興」二十四首は、さまざまな心情を詠むが、総じていえるのは、元末の社会混乱に対する、書生らしい不満といらだちである。

「混沌は既に分裂して、乾坤は遂に開闢す。九重は測る可からず、八紘は渺として垠り無し。遙かに思ふ天地は先んじて、一気は応に細縕たるべきを。開闢自從り来た、幾千の春なるかを知らず。大朴は一たび以て散じ、智巧は方に紛紜たり。至化は日び消蕩す、誰か能く其の淳なるに反らん。我は將に斯の世を遣れんとす、泰初は与に隣と為らん」(第一首)

世界開闢からの変遷を述べるが、もちろん「智巧紛紜」たる元朝の現状を暗喩して嘆いてゐるのである。末二句は「復古」というよりも現状への不満であろう。それは、

「漢皇は豊沛に起こり、三尺もて民の讐を誅す。基を開くこと四百年、烈烈として鴻猷は壯んなり。惜しい哉英明の主、遠謀を遺すを学ばざるを。一時屠狗の徒、業に賛するは伊周に非ず。遂に皇王の政をして、廢墜復たと修めざら使む。此の機は一たび以て失わば、余恨千秋に空しからん」(第四首)

が、漢王朝を詠むようであつて、元朝のいたらくを嘆いてゐるのであるのと一般である。しかし、書生たる自分は何の働きもすることができない。

「客北方従り来る、少年にして美しき容顔なり。綉衣白玉の帯、駿馬黄金の鞍。鞭を捧げて豪右に揖し、意気は邱山を軽しとす。自ら云う金章の冑、祖父は皆朱幡なり。文字を識るを用いず、二十にして高官と為る。市人は共に咨嗟し、道を夾みて粉として駢なび觀る。如何ぞ窮巷の士、首を埋む書卷の間。年年去きて策を射るも、老に臨んで猶お儒冠なり」

元勳の家柄の青年(北人?)が、科挙を受けることなしに、大官として肩で風を切つてゐる様を苦々しげに描写する。ひき比べて、自分は中年になつて意を得ぬままである。

「悲風は西北より来る、樹木は声蕭蕭。蟋蟀は四壁に鳴き、鴻雁は層霄に飛ぶ。時光は忽として已に異なり、四序は更も徭するが如し。人生は百年無し、囑を転ずれば朱顔凋む。胡々明德を崇めて、早く勲業をして昭らかなら使めざる。空しく悲しむ千載の下、身死して名寂寥たるを」(第二十四首)

絶望と焦燥の中に、連作の最後の詩を終えるのである。

また「呉中に客す 詠懷 三首」(『集』卷三)に於ても、

「百為して一の成る無く、壮志は灰のごとく冷めんと欲す」(第一首)

「弱質は重さに任ずるは難く、晩学は終に得ること寡し」(第三首)

と弱音を吐いている。

しかし、文章こそがわが命である。『集』中で最初期に属する「戊子(二三四八)元日客中感有り 二首」の第二首は、世にいれられなくとも文章を自分のアイデンティティーのよすがにしようという、悲痛な宣言の如く思われる。「生平苦だ有り文章の癖、老大応に悲しむべし歳月増すを。館閣は祇今隱逸を招く、吾曹は何の日か飛騰を見ん」これら、書生のいらだちや悲壯感を盛る器として「復古」的な五言古詩がふさわしかったのであろう。

六、「復古」の主張

このままで終わるつもりは陳高にはなかった。科挙に一再ならず失敗した彼は、科挙の採点官になる秦不華に直接働きかけたりもした。『集』巻十五の「達秘卿(秦不華のこと)に上る書」^{たひまう}がそれである。

「高は嘗て以為えらく、文章の気は、世と与に上下に變ず。而して亦た夫の上の人と夫の作者との之が倡を為すに係る有る也。故に世道は方に盛んなるも、而して文氣振わざる者は、世の然らしむるに非ざる也。之を倡する者、其の人無ければ也。其の人無きに非ざる也、其の人有りて、而して文章の司命と為らず、或いは文章の司命と為りて、又常習に循いて、故に而して之を變ずる莫ければなり焉。此れ文の氣の日び卑くして下る所以にして、而して

其の勢い固より以て振起する能わざる也。凡そ今の世の進士と為るや、以て科第を取る者は虫豸の辞に工みにして粉黛の語を飾る。陳言を緝め、記問を夸にし、侈靡を闘わせて、浸淫焉として競いて秦荼頽墮潰敗腐爛の郷に趨きて、而して其の止まる所を知る莫し。今の海宇混一を以て古の未だ有らざるに際す。太和冲厚の氣は融融焉たり焉たり。而して君上は方に人文を觀て以て天下を化成す。此の世に当たりて其れ盛んなる矣乎。而して文章の氣は猶お爾く卑下なるは何ぞ歟。然らば則ち世の盛んなる也此くの若きにして、而して文氣の振わざる也此くの若し。其の人の之が倡と為る無きに非ず歟。文章の司命たる者は尚得て以て其の責を逃れん乎哉」

昔よりある、受験者の事前のデモンストレーションにしては、あまりに激烈で脅迫的ではあるまいか。「而」の字等を何べんも繰り返しているのも、感情が激しているのが感ぜられる。自らを強く印象づけたための演技である面が強いであろうが、筆者は、後の部分で、

「高や性質頑鈍にして、学は疎にして而して才は卑なり。俛俛焉として郷貢進士の班列に駆逐する者は、今秋に於いて再びと為す矣。其の得るや焉、其の失するや焉、是れ命有り焉。高の愚に於けるや、尚何をか敢えて望まん焉。区区たるの懷は、誠に盛世の文氣一変して而して古に之を願う。吾が身に於いて親しく之を觀るを得れば、則ち田野に退伏して黯黯然として其の身を終え、復たと声光の人に聞ゆる無しと雖も、亦た且つ慊然として以て恨み無し矣」

とあるように、やはり「古に之く」復古への熱情を読みとるべきだと思ふ。

ここまで過激な「復古」の主張をさせるものは何か。筆者は、その一端を、彼が温州という偏僻な地域の出身者であることにもとめる。背後を山に囲まれ、出口は海のみにあるような土地に生まれたものにとつては、知識は多くは書物から得られる。政治経済や文化の中心地である、大都や蘇州や杭州の流行についていけない。科挙も仁宗期の復活当初は、素朴な達意の文章を重んじたが、しだいに大都市の流行に合わせて華美浮薄なものになった。地方出身者には政治参加が不利となる。このような状況に対する抗議としての「復古」の役割があつたのではないか。

『集』卷十五の「友人に答うる書」にいう。

「高の文は、幼少よりして而して之を習うに非ざる也。師授けて而して之を得るに非ざる也」

と。晩学や独学の拙なさを嘆くが、逆にいえば、偏僻の地でも書物さえあれば、晩学独学が可能である。

ここにおいても、「復古」の裏に複雑な背景があるであろうことが、推測される。

七、隠居期の詩文

秦不華は方国珍の乱で、中央から、台州に向出し、至元十二年（一三五二）に戦死しているのので、秦不華に出した書は直接には功を奏さなかつたようだが、やがて十四年（一三五四）の科挙で、陳高は及第する。しかし、各地で戦乱が相繼ぐなか、役人生活にも意を得ぬままに退隱する。このあたりの事情は、五言排律の「丁酉（至元十七 一三五七）歳述懷一百韻」に詳しい。その前半は、都にのぼって科挙に合格し、意気揚々たる様までを描くのだが、慶元の録事になってから失望の日々が始まる。

「土俗は何ぞ訟多き、編氓は羊ばは是れ商。由来撫字し難し、況んや復た動動に際するをや」
そしてこの長詩は、

「故土は薇蕨多し、春江には鯉魴有り。帰らん歎蓑笠を理め、此れ従り滄浪に釣りせん」
と結んでいる。

ところが退隱後に却って生活と文学上の充実期を迎えるのであった。無論、紅巾の乱はせまり、方氏の招聘を何とか避けるような緊張の日々が続いていたのであるけれども。

恐らくこの時期に詠まれたのが、諸書に元代江南に木棉栽培が流行した証拠としてよく引かれる「種花を種う」
（『集』卷三）である。

「炎方に種樹有り、衣被は蚕桑に代う。舎西閑園を得、之を種えて漫ろに行を成す。苗は生ず初夏の時、料理晨夕に忙し。鋤を揮いて烈日に向い、汗を灑いで流漿と成る。根を培いて澆灌すること頻りに、高き者は三尺強なり。

鮮鮮として緑葉は茂り、燦燦として金英は黄なり。実を結びて秋繭を吐き、皎潔たること雪霜の如し。時に及んで以て収斂し、采り采りて動やもすれば筐に盈つ。緝治して機杼に入れ、裁剪して衣裳と為る。寒きを禦ぐこと挾纊に類し、老稚は凄涼を免る。豪家は花卉を植え、紛紛として垣牆を被う。世に於いて竟いに何をか補わん、先を争いて芬芳を翫ぶ。棄つると取ると何ぞ相異なる、物に感じて惋傷を増す」

生活も文学も保守復古一方の人ではなかったことがわかる。新しいものを導入し、新しい題材を詩にする。しかし、大切なのは、それを古典的世界観の中に位置づけたことである。「棉」という字が当時すでに一般的であつたろうにもかかわらず、古典的な裏付けのある「種」の字（左思「蜀都賦」等）をわざわざ用いている。末六句では、実際には役立つのに顧みられない綿花と、世の役に立たないものにもはやされる鑑賞用の花卉を対比し、恐らくは人間の世界の同様のことの比喩として勸懲の意をこめる。これは古典の常套であるが、詩の構成としてはやや唐突であるにもかかわらず、敢えて用い、新奇なるものを伝統の中に位置づけたのである。清の趙翼は『陔餘叢考』卷三十「木棉布は宋末元初に行わる」の条で、この詩を引くが、末六句を省いている。それは、木棉栽培を記録した詩人として後世に記憶されるよりも、古典世界に位置づけた努力を認めて欲しかったであろう陳高の意には背いている。

文章でも新たな事態を積極的に評価はしなくとも、少なくとも伝統と妥協させようとする。例えば「林氏祭田記」
（『集』卷十一）

「古者は田は井を以て授く。土由りして而して上は、祭るに皆田有り。然れども其の法の廢壞するや久し矣。近代朱子は家礼を著す。乃ち人をして附墓田を取りて以て祀事を奉ぜ教む」

朱子家礼は、朱子の名を借りて、民間で既に行われていたしきたりを集大成したものである。したがって祭田は決して古来の法ではないのだが、かかる近代のものも、（怪しいとしりつつ？）伝統に位置づけようとする所に、「復古」を維持しつつ、今を尚ぼうという陳高の意志、或いは柔軟性が感ぜられる。

八、海への志向

柔軟性と関連するが、陳高の詩文全般からうかがえる印象は、それらが元末の戦乱の中の悲惨を多く扱うにもかかわらず、悲惨のまま出口なしに終わるのではなく、どこかに救いを残している点である。また「復古」を主張する文章も、自説に凝り固まつて対話を拒むような印象を与える弊がなく、常にオープンな感じがする。

例えば、戦乱下の農村の荒廃を描く「即事漫題十首」（『集』巻九）の第九首、

「江海の波濤に日月生じ、山林の豺虎復た縦横たり。老夫僻して深村に在りて住む、恰も似たり春蚕の繭の裏を行くに」

では、かいこのまゆの中にとじこもるかのように逼塞する自らを描くが、次の、そして最後の第十首では、

「兵革相い尋ぐ已に十年、十人九死するに一生全し。近ごろ聞く関陝王師の出づるを、何の日か南に來りて瘴煙を掃わん」

北方の元朝の部隊が、乱を平定することを期待して終わるのである。『元詩選』では、十首のうち、五首を選ぶが、第九首を選んで、第十首を省く。それでは、自閉したままに連作が終わってしまう。陳高の本意からは遠いのではないか。

このようなオープンな感触は、その大半が陳高の個性に帰せられるだろうが、筆者はここでやや強引ではあるが、温州に育った陳高が幼少より海が存在を意識し続けて来たことに関連づけたい。ここにいる「海」は、自然としての「海」というだけではない。元朝史で特筆すべきこととして海運の発達があげられる。古来中国人にとっては、海は関心の外にありがちなものであった。そこで世界に対する思考の広がりが増える境界線であった。今元朝になって、その海に交通が発達し始めると、限らない豊かな世界が、人生の可能性がそこから広がることになるのである。

陳高の早年の詩からすでに海はあらわれている。「諸友と共に豊山に遊宴す」（『集』巻六）。序に至正戊子（十八年 一三四八）の年号がある。

「俯しては瞰る滄溟の濶きを、渾べて疑う地軸の傾くかと。天光は浩淼に連なり、海気は陰晴に変ず」

温州で船に乗る友人を送る詩も、集中に多く載せる。「馮升伯の航海して帰るを送る」（『集』巻七）

「海を過ぎれば青天は纒かに咫尺、帆を開けば白雁は共に飄颻」

また、「童興都事の京に還るを送る三首」（『集』巻八）。その第三首。

「日は照らす離筵の酒、風は吹く去客の舟。如かず東海の水の、相い送りに神州に到らしむるに」

皆、好ましいイメージで海を描写する。筆者が考えてみたいのは、「海」の存在が、陳高の精神全体に与えた影響なのであるが、今それを分析する有効な手段を持たないので可能性を指摘するにとどめる。

果たして然らば、陳高が晩年渡海して異郷の地に客死したことに宿命的なものを感じる。陳高自身にとっては苦痛に満ちて、悲惨な結末をむかえた旅であつたらう。忠義を守つて死ねたということになつてはいるが、当時方国珍も朱元璋を牽制するために拉廓帖木兒と取引をしていたようであるから、その目的に何かあいまいなものがあつた可能性も否定出来ない。ただ、人生を一個の芸術品として、作品と切り離せないものとして見ることが許されるならば、彼は最後に彼の精神にふさわしい完成を迎えたことになる。

九、おわりに

陳高の作品を紹介しつつ述べて来た、「復古」の形をとつた、諸生としての不安の表出、地方の都会に対する反発、新しい風物の位置づけ、海への志向等の新傾向は、私見では、この時期から強まって、現代中国に至るのである。

元末江南に起こつた精神、価値観の変革についての体系的な叙述の出発点としたい。